

教育課程の充実～学校評価の活用

前日本メキシコ学院日本コース 教諭

北海道旭川市立東町小学校 教諭 木村 伸一

キーワード：教育課程、学校評価、保護者連携

1. はじめに

日本メキシコ学院日本コースは、前身のメキシコ日本人学校とメキシコの現地校が合わさり同じ敷地内に開院した学校である。2013年現在、日本コース約120名、メキシココース約700名の児童生徒数を誇る。この児童生徒数により、施設面では温水プールやトラック付きのカンチャ（グラウンド）などがあり充実している。カリキュラム面や文化・風習等、両コースの違いが様々ある中で、文化センターや日本語教育部が両コースをつなぐことにより、授業交流や文化交流が試行錯誤の中で進められている。

日本コースは、小学部が各学年10～20名程度、中学部は5～10名程度で、すべて単学級である。派遣教員数が年々減少しており、現地採用教員を増やすなど、他の在外教育施設と同様のことが起きている。そのような環境の中で、様々な教育課題や児童生徒の能力の向上、保護者の要望など、あらゆることに取り組んだ。

<派遣教員として求められるもの>

派遣中の校務分掌は、年度順に小2担任、小学部長、教務主任兼小1担任であり、求められるものが年々幅広く大きくなっていった。1年目は力を発揮しつつ足場固めを、2年目は1年目の経験を生かし中核となり、3年目は全体を見渡し教員の「鑑」となれるよう常日頃より努力し研鑽した。

派遣期間を振り返ってみると、派遣が決まってどのような目的意識をもって赴任するのか、また1年目で在外教育施設での押さえどころを早期に掴み、仕事に取り組むことができるかが重要であった。派遣教員として求められるものは多々あるが、5点に絞ると以下の通りである。

- ① 教育公務員として高い品位を保ち、任国の礼儀にも通じること。
- ② 常に向上心をもつ。任地の児童生徒、保護者などに応じた柔軟性が必要。
- ③ 教諭であっても、教育課程をデザインする力、経営や運営の視点が必要。
- ④ 個人プレーではなく組織的対応が不可欠。「協働する力」が必要。
- ⑤ 的確な情報を得て、学校の経営方針や児童生徒の状況を「発信する力」が必要。

ここでは、3年目に教務主任として教育課程の充実と改善に取り組んだ内容について述べる。まさしく教務主任は、教育課程をデザインする立場として、大きな責務が伴ったが、それ以上にやりがいのある仕事であった。

2. 教育課程の充実と改善

(1) 多様な教育活動の整理と位置付け

平成23、24年度の学習指導要領完全実施に伴って、4つの目指す児童生徒像を見直したことから、教育課程についてもそれに照らして位置付け、明確な価値付けを行った。そのために、校長の学校経営方針を受けて、前年度から改善に取り組んだ。即対応が求められる在外では、新年度が始まってからでは十分な改善を図ることはできない。前教務主任とも連携し、継続的な取り組みとなるよう熟考した。



「2012年度 教育活動構想図」

様々な教育活動があるが、今日的な教育課題、児童生徒の現状と課題、保護者の要望等から重点項目を決め、各学部経営方針にも反映させた。

校長の経営方針、学校の教育目標、目指す児童生徒像、具体的な教育活動、各学部経営や学級経営等、縦に横につながりをもたせて、すべての教育活動を展開していくことが大変重要であった。

(2) 学校評価の活用

教育課程は計画である。その教育課程を実行し、適切に実行されているか評価改善することが大切となる。その評価の1つが、「学校評価」である。こちらは前年度に大幅に修正した。具体的な教育活動に照らした項目と学校経営や学級経営に関する項目に分け、全24項目に細分化した。

教育活動～〈知〉学習 言語活動（表現） 〈徳〉あいさつや礼儀 〈体〉基本的な生活習慣 忍耐根気 健康維持体力向上 〈国際理解〉受容尊重 交流授業交流活動 等 学校経営～教育目標 ニーズに応える教育活動 学力向上 生活習慣向上 健康安全 経営の発信 結果責任 環境整備 参観機会 接遇 等
--

学校評価アンケートは、児童生徒、保護者、教職員のそれぞれに取った。また、前年度までは12月だけだった評価を、10項目程度の重点項目に絞った内容にし、7月にも取った。短いスパンで職員が入れ替わり、また海外赴任が初めての教員がほとんどであることから、4月にスタートして3か月が経ち、軌道に乗っているのか、どこに課題があるのかを掴み、夏休み以降の経営や教育活動を円滑に進めるという目的をもって行った。

集計したデータは、そのままではただの数値である。各学年ごとにその数値の裏付けをし、価値付けて改善策を立てることにより、効果的にはたらくものとなると考え、以下のように目的を明確にし、ていねいに分析をかけてフィードバックした。

〈データの見方〉 ※学校評価はA, B, C, Dの4段階評価となっている。

① どこを見るか？

- ア) 各項目の平均が3.5以上(A), 3.0未満(C, D) Aの割合が多く取れているか？
- イ) データ分布(一つひとつの散らばり)

② 何と比べるか？

- ア) 項目ごとの比較 イ) 7月(年度当初)との比較
- ウ) 前年までとの比較～年度ごとの大きな変容(経営改善の効果)
- エ) 兄弟との比較～保護者の捉え方に違いがないか
- オ) 児童生徒、保護者、教師、の捉え方の比較～共通点、相違点

③ 何とつなげるか？

- すべての教育活動(学級経営 学部経営)
- ア) 教室や学校での生活習慣 イ) 毎時間の授業
- ウ) 学級や学部の軸となる取り組み

〈分析活用〉

- ① 学校経営全般について客観的に傾向をとらえ、今年度の取り組みの成果と課題を分析する。
- ② 学年や学部ごとの傾向をとらえ、学部や学級の重点目標が達成されているか等、分析する。
- ③ 個々の児童生徒と保護者の相違点や共通点から、教師と児童生徒の捉え方について分析する。

アンケートには記述欄を設けてあり、保護者から出た意見は全職員で把握し、必要な手立てを検討した。分析から得られた傾向や対応策を各学部、学級、授業レベルに落とし込んで改善を進めた。

<保護者意見交換会の開催>

保護者へ学校評価の考察や今後の教育活動について直接伝える機会として、年に2回保護者意見交換会を開催していた。第1回の9月はI期の学校評価を基に、各学年の傾向を発達段階に応じてまとめた。第2回の2月は、II期の学校評価を基に児童生徒と保護者のとらえ方の違いや課題等を分析してまとめた。児童生徒の現状を、学校と家庭が正しく認識し適切な対応を取っていくことが大切だと考えた。学校評価アンケートの時期と対象によって、伝えることも変わってくる。

第1回 9月実施	第2回 2月実施
① 各学年の考察	① 児童生徒の変容～I期（6月実施）との比較から
② 小学部まとめ	② 児童生徒アンケートと保護者アンケートの比較から
③ 中学部まとめ	③ 学校経営に関して
④ 全体まとめ	

(3) 教育課程推進の具体的な計画と実行力

在外教育施設は、様々な職員の集合体で、学校の教育目標達成のためにある程度方向を同じにして進めていくことが大切である。校長の決定事項や会議で決まったことを、きめ細かに児童生徒の活動や対応に落とし込んでいった。

- ① 計画立案～校長の経営方針から具現化し実施計画を作成する。
- ② 検討修正～事前に校長と目的や内容を確認し、企画会（校長、教頭、各学部長教務）にて各学部の立場からも意見をもらい検討し、必要に応じて修正する。
- ③ 周知徹底～職員会議や各学部会にて、全職員に知らせる。
- ④ 実行確認～計画を確実に実行し、進捗状況を確認する。
- ⑤ 反省改善～事後反省を出し、改善策をあげて次年度に送る。

計画は緻密に、進捗状況に応じて臨機応変に実行し、成果を上げるために、教務主任として心がけたことが、1年のサイクルである。年間行事予定に照らして、実施計画の作成や提案時期を決め、3か月先を見通して準備した。計画が整っていることにより、事前の修正や中途の調整などにも対応できた。また前年度に次年度の方向性を明らかにしておくことで、同じ議論を繰り返すこともなくなった。

3. おわりに

派遣期間中、大きな事件や災害に巻き込まれず、安定した教育活動を進めることができた。どこの国でも、何が起るかわからない状況がある中で、このようなことは稀なことだと思う。よき教えを与えてくれた先輩、職場の同僚、そして家族に感謝している。

3年目は、教務主任として小1担任として駆け抜けた1年であったが、年度末に在外での経験を含め教職経験20年の一区切りとして、「学校評価データの活用の仕方」「子どもの力を伸ばす学級経営」と題して、資料を作成配付した。少なからずこれまでの取り組みを他の教員にも伝えられたらとの思いであった。

「はじめに」の項で、派遣教員として求められるものを5点あげたが、日本とは違う環境に自ら志願して派遣されて行くのだから、向上心をもち真摯に取り組み、海外で暮らす子どもたちのために、どれだけ力を注ぐことができるかに尽きる。派遣された年齢、教職経験、教師としての専門性、その人それぞれの持ち味など、自分の何を発揮することができるのか。それを見つけ、自分の持ち場でやり切ることが、子どもたちのためであり自らのためにもなっていく。時には議論することも起こるが、批判と捉えずにアドバイスと考える。

在外教育施設は、派遣教員を即戦力として常に成果を求められるところである。生活環境や派遣者数減などの学校環境等、厳しい環境であるからこそ、より多くの熱意あふれる若い教師に、困難を伴うであろう異国の地での教育に立ち向かってほしいと切に願い、結びとする。